

川端康成氏が自殺

鎌倉由井ヶ浜は、作家川端康成氏の散歩道だった。その浜ずたいにあるマンションの仕事部屋で4月16日、氏は自ら命を絶った。

日本の伝統に息づく美とかなしみを深く愛し、表現しつづけた川端康成の生涯。

鎌倉市長谷の川端家に生前親交の厚かった人々が駆けつけた。焼香に手を合わせるおももちは沈痛だ。

大正13年、東大卒業後、横光利一氏等と「文芸時代」を創刊し、「伊豆の踊子」「浅草紅団」「雪国」など発表。新感覚派と呼ばれ、プロレタリア文学と並んで昭和文学の旗手とうたわれた。

戦後も、意欲的に「千羽鶴」「山の音」「眠れる美女」など発表、ゆるがぬ川端文学を築きあげた。

昭和43年に、日本ではじめてのノーベル文学賞を受賞。この時の記念講演で、「美しい日本の私」と題して日本の心を語った。氏が好んで散策したという鎌倉大仏殿の高徳院の庭は、それを物語る。氏はまた、世界平和七人委員会のメンバーであったり、昨年の都知事選挙では秦野候補の応援にかけつけるなど、創作の世界以外でも幅広い活動があった。年齢を感じさせぬ氏の生き方にどんな影がしのび寄っていったのだろうか。

昭和45年、自衛隊を憂い、割腹自殺を計った三島由紀夫の死に、「もったいない死に方だ」と語った川端康成。三島の文学の良き理解者だっただけにその心の痛みも大きかったに違いない。はなばなしい三島由紀夫の自殺に較べれば、一沫の淋しさを感じさせる川端康成の自殺。「自殺には遺書など無い方がよい」と生前語った事もある。遺書は発見されていない。享年72歳。

日本人の心のかなしみを追い求めた作家川端康成は、そのかなしみを抱いて命を絶ったのだろうか。誰れしもが、「なぜ」と問いかける著名な一人の作家の自殺は、今、大きな波紋を投げかけている。

快調！ ドラゴンズ

—中日、巨人を連破—

開幕以来、無傷同志の対戦、中日対巨人の今季初顔合せは、4月14日夜、中日球場で行なわれました。中日は好調パートの打点、投げては、稲葉・星野仙のリレーで快勝。雨のため中一日おいた4月16日の第2戦は必勝を期した巨人はエース堀内をマウンドに送ります2。3回までに5-0とリードした巨人に中日は4回裏ミラー・木俣のホームランで1点差に詰め寄り、さらに8回裏木俣が1塁左を破って6-6の同点、大島のセンター犠牲フライと、ツキ男パートの3号3ランホームナーにより大量6点を奪って一気に勝敗を決めました。

それにしても、好スタートを切った中日はいま、完全にドラゴンズ旋風を巻き起こしています。